

子どもと女性の健康相談室

37



福島医大ふくしま子ども・女性医療支援センター長
水沼 英樹氏

水沼 英樹氏

「OCC」すなわち経口避妊薬(Oral Contraceptive)は、一九六〇(昭和三五)年に米国で初めて認可された薬剤で、正しく服用されれば最も高い避妊効果を持ち、現在では世界中で広く使用されている製剤となつています。発売当初は、含まれる女性ホルモン(エストロゲンとプロゲステロン)の含有量が高かったため血栓症などの副作用が問題となりましたが、その後、できるだけホルモン含有量を減らす方向での開発が進められ、一九九〇年代には現在の低

用量ピルが使われるようになっていました。これに対し、わが国では先進国の中で唯一低用量ピルが使えない国と揶揄(やゆ)されていたほどです。わが国でこれほどOCCの導入が遅れた背景には、ピルを解禁すれば

は先進国の中で唯一低用量ピルが使えない国と揶揄(やゆ)されていたほどです。わが国でこれほどOCCの導入が遅れた背景には、ピルを解禁すれば

改善、月経量の減少、月経前のイライラなどの不快な症状の改善や生理不順の解消など月経に伴う症状に対する効果に加え、ニキビや多毛の改善、

さらには卵巣がんの発生リスクを低下させるなど極めて多彩な作用が報告されています。これらの幅広い作用を持つことから、低用量OCCはLEP(Low Estrogen Progestin)として月経困難症や子宮内膜症の治療薬として保険適応を

してきました。すなわち、OCCはもはや避妊薬としてではなく女性の健康維持薬として認識されるようになってきたのです。しかしながら、わが国のOCCあるいはLEPの使用頻度は4%程度で、欧米から見ますと極めて低い状況にあります。もちろん、ホルモン含有量が減ってきたからとい

健康の維持にも活用

避妊薬を求める患者さんに対して、これらホルモン容量の高い製剤を処方せざるを得ませんでした。一九九九(平成十一)年になり、ようやくわが国でも低用量ピルが認可されましたが、それまで

ば性道徳が乱れるとか、あるいは性病がまん延するとかなどの政治的・科学的根拠のない意見があったようですが、あながちそうではなかったと思います。一方、低用量OCCには避妊以外にさまざまな副作用、すなわちメリットのあることが明らかになってきました。月経痛の

で、副作用の発生がゼロになったわけではありません。極めてまれですが、重篤な副作用の発症も知られていますので、服用に当たってはやはり注意が必要です。今ではガイドラインも整備されていますので、主治医とよく相談されると良いでしょう。

経口避妊薬

副作用の発生がゼロになったわけではありません。極めてまれですが、重篤な副作用の発症も知られていますので、服用に当たってはやはり注意が必要です。今ではガイドラインも整備されていますので、主治医とよく相談されると良いでしょう。

次回(5月20日)掲載